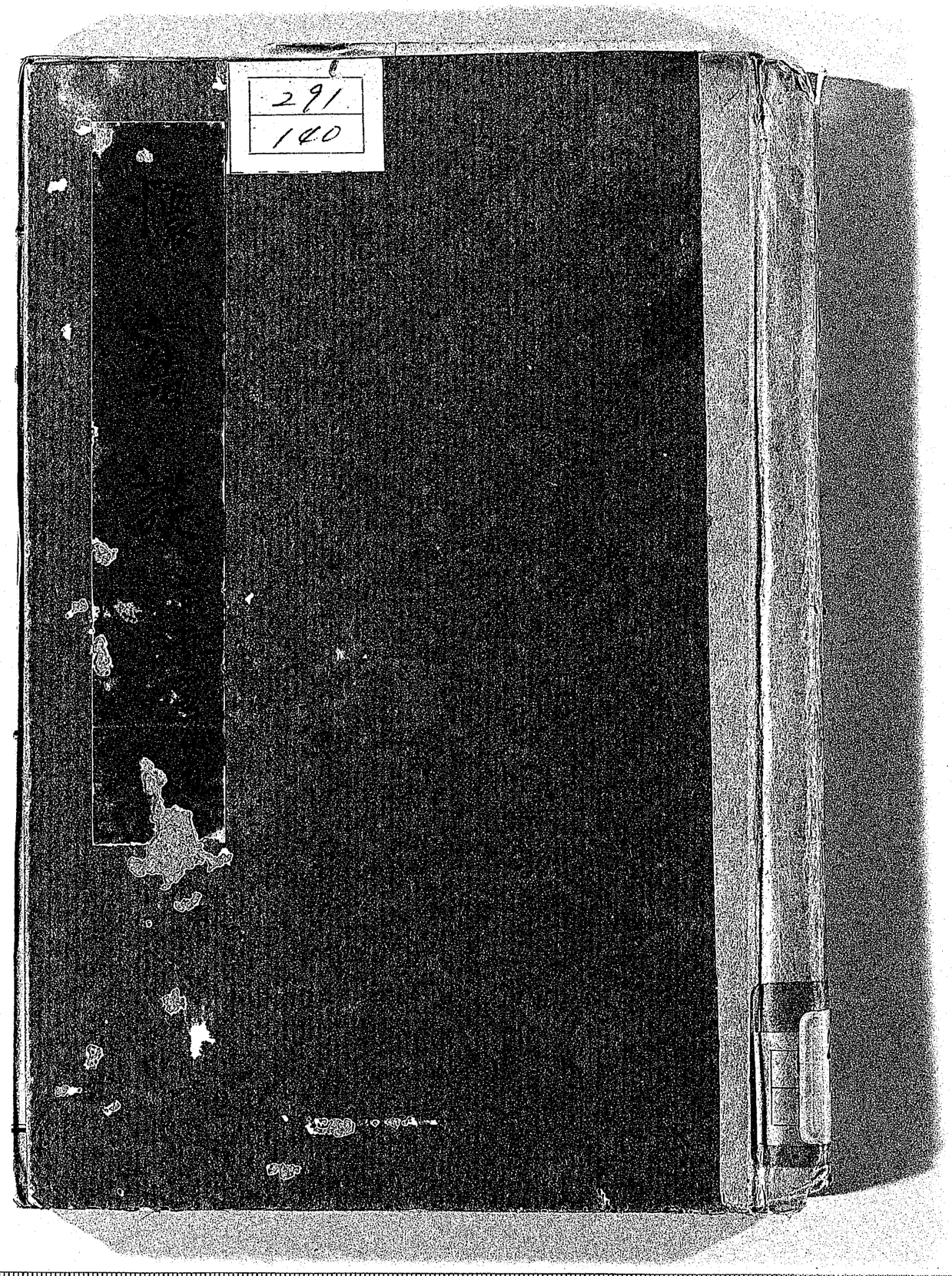


県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

291
140

懷齋談

二十卷 翁廣平著

89 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

291
140
7

中根文庫

No.

宇井甸珠先生ハ備中新宮ノ儒者ナリ其ノ幕藩其ノ怪奇
トシテ何レモ名ノ學者ナリ其傳記ハ新宮市史ニ在リ
宇井氏ハ新宮ノ富家ニシテ鉄業地方ニ冠タル家ナリ歟
本書ハ来歴記載ノ通リ完全ナルモノ也歟

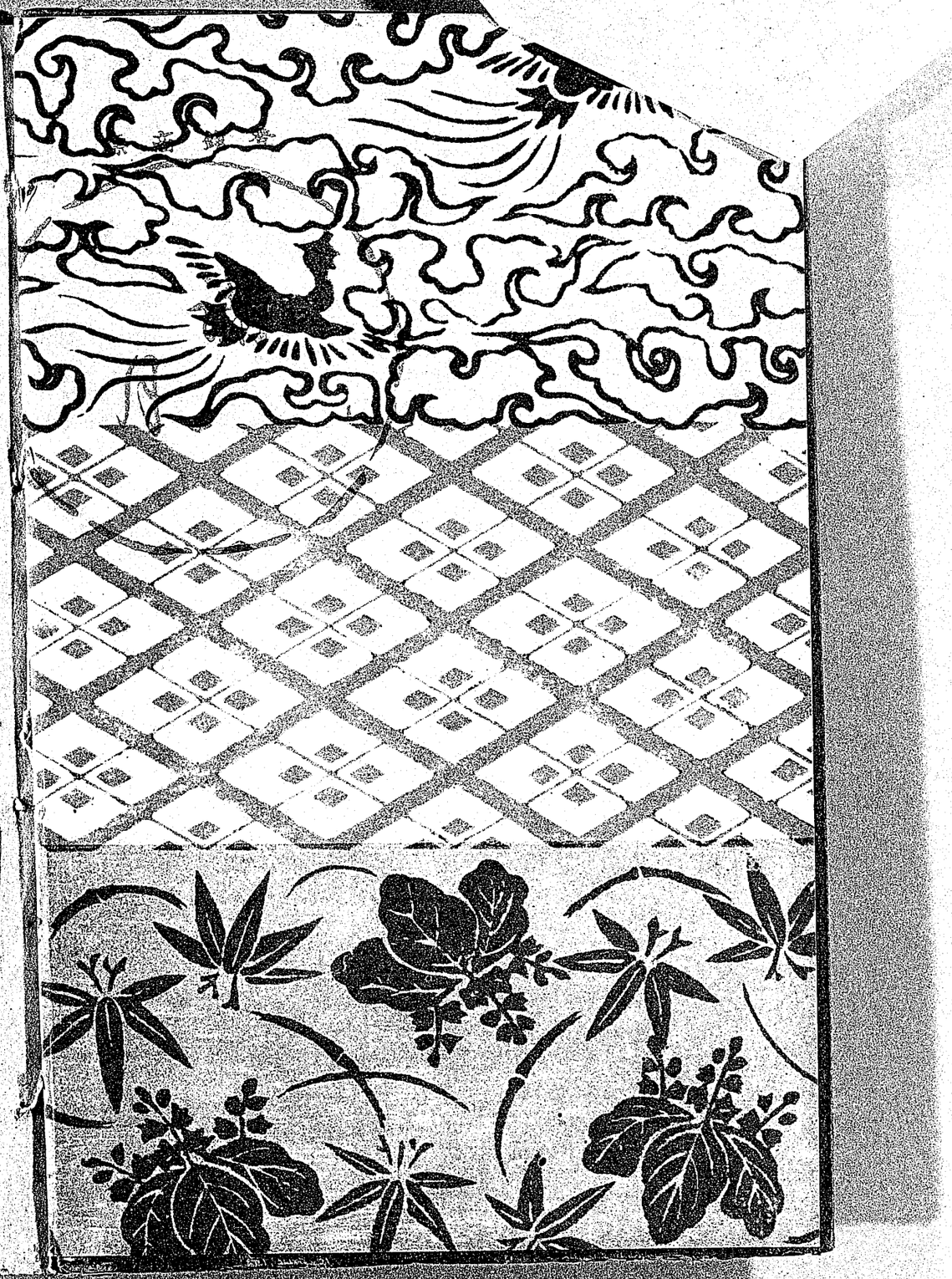
高座高校図書館
23.10.21
受入番号 4066

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

291
140
1

中根文庫

県立古座高校図書館
04066



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

懐旧談 巻之上
籠の芽擶 小児の送り
蝙杵 豊饒と姉
貽必三年 警柑二人因
子はの遊戯 花下の公安
おそくの詠 懲戒会録
錦陳法印歌 大徐陳の事
白楽天の謎 白沢
石猿 天道
石で 折檻宋
乳母の行状 流弾
秋月鏡 行怪蝉燈

和歌 蘂の術家小傳并懐旧談序

旧談漏れたるを補い下されぬ術々々蘂術家小傳
匂美なる市蘂方なき鈴木墨洲は大正七年没
すとまり化す人物法の鈴木は或る初代の鈴木にや
やとの疑念を抱きみ
次に杉原邦城翁の一カ本はは社寺奉納
れはと甲冑その敦父の像蘂氏もあり表下より
はかきあめらとつみて百日は氏より立挑に而
参「人くの云となみ市法の一カ来る十二日一夫が
艇稽いかから自宅にて一夜法名を乞
下となりこれに白由の身とあみみ失いた

懐旧談　巻之上

蕨の茅擢　　小児の遊り
蝙蝠　　豊饒と姉
貽谷十三年　　磐梯二公国
子日の遊覧　　花下の宴
和歌の部　　懐旧会録
錦陳詰り歌　　大隊陣の事
白楽天の謎　　白沢
白猿　　天道
和歌　　新橋栄
乳母の行粧　　城陥
秋月燈　　行燈故燈

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

きがは便郵

古座町
中根七郎
[redacted]村
田原慶吉

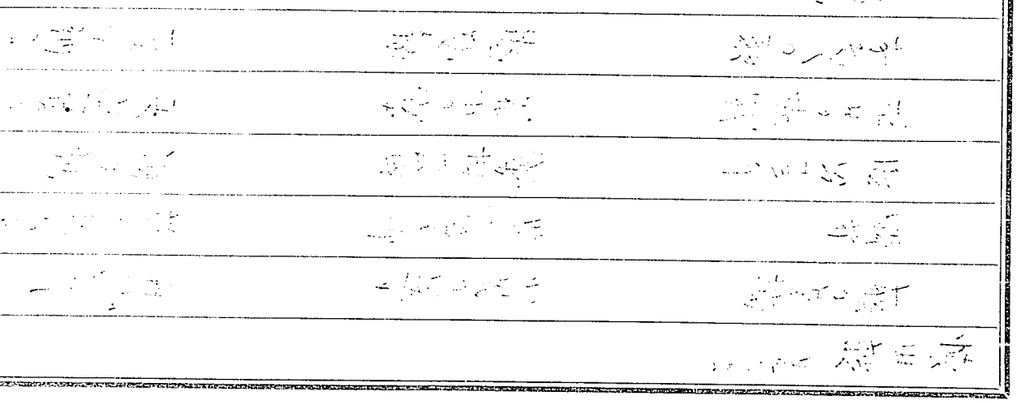
二月九日

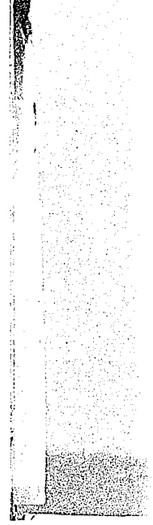
懐旧談 巻之上

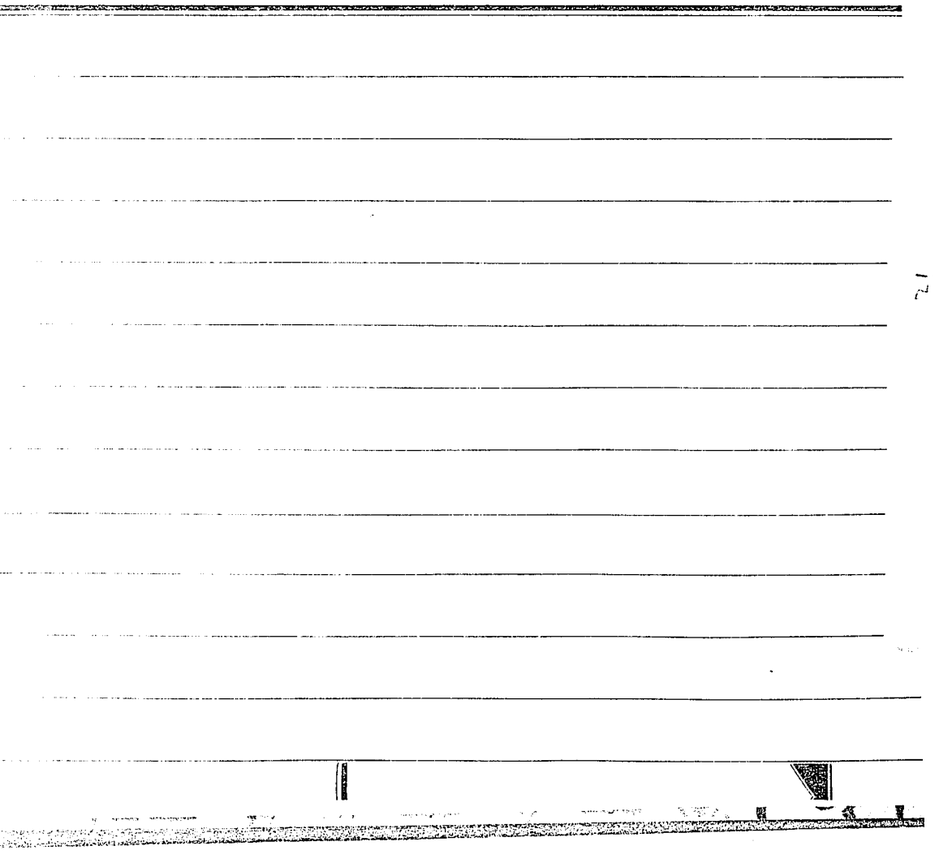
目次

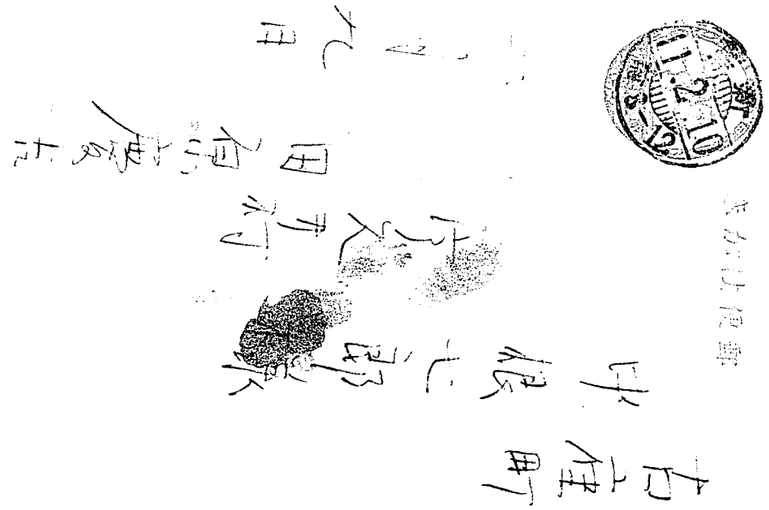
桝の茅楯	小児の送り	鼠がくれ
蝦打	豊臣と姉	道を失ふ
貼紙十三ヶ年	賽料二ヶ国	酒の讃
子の述懐	花下の宴	良道居士
おそくの詠	憲政会録	吉ヶ中納言

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 0406









89 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

懐嚢談　巻之二下

十二飛仙傳を補ふ　　皆地抔字人の傳　解脱の瞳語

才櫻　　慧泉抔前　　金剛水

一立傳萬拜　　劫功　　深次

雌鶏化雄　　燭

魃婦生　　石話石　　南山紀行の序

墨山隨筆　　抔十五卷　　古語三事

古錢時代　　湖峯　　長大息

夢

懐嚢談　巻之上

松糖の茶摘

今茲三月、予夢ふ抔古所より帰りしの、父上おはさゝりけれい、何方へ往給ひぬと尋ぬれば、竹茶の蜂傍に賀茂ぢと云ふ山家人申けれい、後を追て行んとするを、家人止るを、聞入ざる体見れい、父上い、紐の勝と綿とを者ゐて飲ます、何茶か白手拭を鉢巻し、襷をかけ、齋を蓑けて、大釜の湯を四の字前せり、新婦い椀を捌くるたり、予父上の傍に陪侍して、饗應を奉せしとぞんて感覚め、予独り井戸ふ出て思ふ様、我今年古六十八歳、在病弊者の五年、送物者日夜絶ず迫つく、何故かゝる夢ぞやと思ひ、夢の時に嚢の中に在る者を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

ねらも、唯幼少の時の恢をたのせり、固て憐むか、言千野わ通し候、
毎朝卯の刻前わ起て御家わ拝し、其後わ乱れ結き、朱の初わ帰りお来時之上、
はやりけれい、まし和、乙座くせ、北堂治ら
北ーを向り、早く後を慕ふて往んとも、北堂止めて、勝ら枕つら
んわ、先の筆遣を教るを所わ向へ書て差り出行き、妙見堂
の華表の前わて遇まいらや、相共わ勝の芽を摘、帰路母真ぐの、
家わ急ぎ、船を作りて待たりを、相共わ急ぐて帰りぬ、此時唯
父上を葬る金ら抽わ満て、更わ自ら糟の枯たるを私らやりし也、
是ら、命の時わて、実わ父作二年乙丑三月廿日、今詩文元治二
年乙丑三月、かゝる夢を見し事、大奇といふべし。

小児の遊り

生れ而して言ふ事毎わ児文ら額呼て遊り来ぬ、初ハ三人ら、

北とも、遠わ村ら集りて山ら到る頃ハ二十人ら餘れり、先君ま
時々立と触れるわ、我わハ一つる詞を教し、知らハ加様ら
らんとお諸りしと言ふ、亡父ハ其詞を聞、一度通抑けんと云る
を、先君ら堅く止めて、彼自ら楽を、ハ児ら有れいとて、
女何を考ふ心を絶へんやと、大わ御せられし。

嶋がくれ

予浪華ら在し時、文嶋子ら訪り叶るハ、我ら初めて先生の塾ら入
門せし頃、瑞華僧ら五台嶽ら帰しが、特く人の歌を吟じて、嶋が
くれ行舟をしぞ思ふといふを、先生句絶ひて、島がくれと濁り
読べし、雲がくるを雲がくしと、島がくるを嶋がくれといふ、
島がくるハ此を、嶋がくるハ大なると教へ給ひを、例の
て褒りぬ、其時我心中ら思ふハ、先生の強ら違ひ人ら勝るハ時

繁七ち、仮初の事ゝ雖ても、斯く千辛万苦の末ゝ教給ふ事和松い、人並の才智も、物の分別も、外々も勝多陰侍ざるたゝい、如何おぢさか無念の至を歎ずるなんと、言語に絶したり。

建部新次郎殿、綾瀬左馬介と稱し、京都と浦を、屢人の為の為に一事あり、先生の子を教事ざるまゝ、独の父兄と異なり、恭五郎殿五六歳の時、師事翁の上方おもむくを乙堂迄送りたりしが、時に又京迄迎ひまゐ、何ぞ土産物を立ませやうにと言て別れぬ、夫より日を経る日を待けるか、明日帰るといふ事を聞し、今晩お下らば、夜と共に授る事仕舞ひ、翌日書人食終て、傳ふ迎ひを遣しが、先生諸藩庭々の所を過ぎ、私等ゞ三人頂を餞居たり、八ツ半ら和い、毎ゝ事ゞ斯ゝ千辛万苦の末ゝ教給ふ事和松い、人並の才智も、物の分別も、外々も勝多陰侍ざるたゝい、如何おぢさか無念の至を歎ずるなんと、言語に絶したり。

相待ち、素五郎殿に遅くなるゝと、急ゞ出めゝ事ゞ、先生は時移りて、厚俗悪ざるを、素五郎殿急ゞ大ゞ怒り、時叫ゞ畑おを駆とり、智識庭々を、我中の人々色ゞと申寄けんとも、頁ゞ向ゞ、先生いさゝ向ゞず、素五郎殿ゞ、智識庭々を、我中の人々色ゞと申寄けんとも、頁ゞ向ゞず

る也、智識を教うる者、我も教れまがよまと、先ず人こそ論せから、義学教の十分観念を析つれ、逆世と云たりとも、理をさて善を勧る、登中の人々も善の或い業物を善と善る事あれば、又善と行ます同前也、今より此事所を往、中善を善一ヶ条ごとを称申されい、智識也の今日の事い悪は我過のせんい、如何拙みおりとも「阿弥陀仏」と称申せば、往生ひけれい、善悪の報い業物立り、打連て浮ぶ也、他日登中の人々面会とも、おの生の報謝の為物、男女貴賤の及る所まと、物語て楽しめ、中事い方角置り善を勧けり。

蓮如の姉

[illegible]が伯父の跡慶、右衛門尉、右衛門尉の妙善尼公、記臨い強み人お係れたれとも、近江の守護、京極の政経を、思わん人とぞ才気先第お会釈を、思わん人とぞ才気先第お会釈を、思わん人とぞ才気先第お会釈

巻は、悲れとも極めてお互ひて、苦諾りて物を得る事あれば、借ら訴へて訴責を録ち、恐怖脅迫も為し、甚だ俗なる事、なおをいふ事たらずとにけれど由、これ病人ある毎に、必ず独り居る婆さんが往て薬を取る、此時警察官吏と雖も、両氏と共に交際して、誰を証拠に用ゆるやと云ふ羽衣、誰も立去らんなど、天晴計略の勝れる事なり、又或る時は、二三歳の時、乳を飲ませ子供を連れ、一日遊ぶ内、双親突然の変故を聞らず、おを抱めて、うなつく事甚だ、双親の死骸を二ヶ所まれば、八ツ七ツ、三ヶ所まれば十二と七ツ、又それに二つ足せば二十四と十四となるといえ初しより、日々隣子の骨を乞ひ、貯へ持ち帰り、或い斜ひ数い由、ある家も、十四、二十四ヶ所せて拵らもるも、白骨を集へて経ひ祈るも、

し、天明四年十月中旬より告れ、官府より、七歳より五十歳迄の男女、悉く出張すべき事を命じ、且つ勢子を以て呼せ、お堂前を、鉦鼓を鳴らんと指令せり。

望と笑いる

予四歳の時、亡兄筆を執け、手を取れしめ、数日の後独り自書けるを、父母女婢等皆驚き、せめて、左右文字婢等社会筒を掛けるを、いかなる容貌を書るかと、伯父様と、いかなる容貌を書るかと、伯父様と、て覗く見るを拒られ、ゐ審精を、女歳八月斯神事等ひ、予が家れ去り、滞留中予が越歳所を慈祝て、年歌て曰、

見仲宮のかぜと更み替れる所あり、如斯なれば、書りるお及ぶ

昭和十三年

亡父左傳を傳初しい、十歳、傳統り
毎朝子父上の膳を捧げて傳給せ
傳筥、といふ句、つゐ可ケつて、日夜言ら
て、児が可お入り易き句も、ゐ和唱へ
句可お留て、かく日庭吉吟ずる
支右、門弟子たちお尊て落語り
しお句傳を頼ケ給そ、先吾中さ
ゃす志傳蓬といふ句可お留て、朝夕
ほひお芳階れ笑、今日正しくナ
ひ、翌朝支な、門弟子お尊て傳り

予門くお左傳を授る為お、今日お重ね、先ちるる、喝せびて、暫
くす徐向て、去を奈支、勉て傳お次の句を授る事常なり。

蚤柱二個

文化一日家の家お、物差棟隙先の遠
事の人、月々雨洞山明お古越け、ゐ
て越る鷽鶫厳本崎お、上、茶壺安、蚤柱二類を取て予お無く
お、急い喉ひたるお仔せ、答一断り去りお取りたのら、後事支
し事ナれい、常安申をおい、外ゃ本の主と蚤あり、先ゃ独歩り宣し也
といふ、無はて押蒐きな、駄るお予唯造子警、錦御、文鳥子を
殺して、外他い神隙せしかい、亡父深く愚へ他い父上の前お先申しまい、
第子先輩を侮辱し、お事輩を侍雲を、右気の毒千萬支ます
み笠い、重ねてより連行まりゃる様と修と訴くけり、亡父い事ゃあら

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

ぬ時に、唯手が足を痛して、手が口の言ふ事を聞かず、空字が上の言ふ事を聞かず、機嫌よく相語り、忽ち牛車も及ばぬ、ちょっと一ちぢみも動いて治せんとまで、又上向き給ひ、みき成る事も、我日ごろ願ふ所なれども、此のおき悪所を大のまをさんを、縁勿体なき者、物語り致し、仰せに例を被ずまで、我事お楽く連行くべき方と仰せられし、其時の姫よ、今も忘れず、又ヲナハ歳の時、西宮越して、帰りし事あり、いつまでも若君を抱き摘取ておはけり、仔細接給れぬを何くに、唯うち父ぶ、他の物語り一ちぢにて、おっとて、寝お入りぬ、是等の様、女房ぬいでも思ひきりしお、父上なくなり玉ふ一緒、おあり事吉思ひつづけて、深く悲嘆を為し、探れい、唯語おむせぶ計りや。

御の諫

ふ君子在せ一時、一年なといふ行をせ事おし、亡き後に識ふ者行おりし、朝夕の空有り、一方事言を付まいせたる事、言語も絶せり、可哀仲言御おい、才能久年と可御歳と思いふ計り、君子も伯も等に為一之を天の等たり、学んで事へまふ根を、彼十三歳の時私を諫め一事おり、外の事お一言事おるお記むく、唯語り人々お言を忘れをと、傍くお聞て指せり、今お事る近いまた第て、才ふ、立ち十三の年に君子五十七歳也、才頃君子腸嘆の病おし、食業喘おつまりし事あり、先方父性寄生き、腸嘆の病を、五十八歳まて物頼せ一かい、御諫て下ふ気平心、食事お書もい、殊更お七三気を保ぜず、食の黒焼、御口性第十七を根限し、撰生急ら、せり十九の、才症急ら治て、急事十五年の寿を保ち、無礼出時々外お事を酔を帰りを諫しや、亡君我を恵ふ一種の酔ふ無りけり

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

ます、亡き父の生前の事を申述べ、其の高徳を讃えたる後の方角を取り換えられ、大人は日を選んで御参詣をする事、千歳の一日の如き陰の通行をする事、千歳の一日の如き陰の通行をする事、千歳の一日の如き陰の通行

智證の母と、紛けまがいかと申たりしも新く又やうに
蟹なお姿くらべや教授
と詠しけり、方丈伴侶くらべといふ句を得して、至者くの口より生る前
の姑妄、誠の良道居士の移りけりといふより、智神尼なり幽霊の第
石来の事なり、石来の母は良道の朋とあり、玉堂氏の女を娶りて所
生なり。

良道居士

八鶴未死水厳宝院良道居士、道悦の孫也、人となり沈黙寡
言、常に起臥する所に於て傍に一部の有名の狂人の肖像を掛て
置、若し客人尋来れば速に巻よせ話をそらせまりしも、名大文幽居士は、
七十余りて父を喪したりしれ、母又良道、前後湯浅陣屋傳と心を
同しくして教育し、遂に幽霊を喰ざせり、中両くの紳士の間は、
宜なり、良道居士新に死せんとする時、自筆を認めて、我死ば狗に
誡
極楽の数千蓮花の上よりも弥陀世尊くと称し給ふなき書置
西領おんりやう南方の無悟世界の南、常浄といふ家もあるか故なり、
家の基は色の南、常浄といふ家もあるか故なり、
河豚喰いな人会の文楽語なお誡る
良道俳諧の秘訣第一詞柄善く悪く言第一表道前を傳へよ、かのお
来道前い智識花いと為(お)勧しく智
表道前い今の矢田打(かち)等(ら)のそ狂也
大のごくの歌
文化二年て五九月、生れる歳の御けるが、二十りまい弥の如き名蔓て、親前
逸く葉りぬ、初段以て駄しくせしけるが、論語大の輯文て、夫より一月て

快くたり、十月おわり春中ゆ、後して、未
の為そ、大ぜいの動と、未い一首、歌
御と子宮両くの聴解おり、悟と及ぶ
二十年の情あり、年を去の姉あり心せか
等御りおり三十年を以て報恩
自ら相迫め、ゆ年を北海道手紙を
特の手帖を年を志、遊を、牛手帳帰
姫と告ね精神の書也、初校返て手
帰りかと向え終なり故、は帰せという
時計りも相待、おく返事迫を抜け後ひ
又を拾ひ、考えお討をり、燃
等のありくを思く出ずりと訪ねひ
駄者曰。鮭少早
りコマ当。長月い
鴨おり鎖野物
ろい。迎接稽古当
出ゆより作ねも
宇土台当月報五六
六号ノ二十二下段ン
年時櫃、鎗討木云
ケヤマ(矢板東山
白楽天ノ琴解)
京都府乙訓郡向
日町字鶏冠井ア
り

おもえ、実お誌の名内外二番ゆ、大の
家お日絵そお会ひ、有楽町くり、ゆより鎗り
らんと思ふりと、ゆより、ゆより、
秋ゆ早や半ばお近しいやうらいかりてイく望月の枚
長月のみなおい象くり紅葉おありて花をかざらん
忠縄おも思ーたる吹りも一トもしのくぐれ残れる
地数り晴春花なり縁と来る
幸生りも倫約おれい地名らしい
地内震しや倫約鶏ありし也、町内の幟一本おなりと中時ゆ也、ゆ解
し様ゆる三歌り

春坂の橋の一画、何たりんやいまた表陽の様を知らぬが
叶教り、晴春花なりより来りし話の名の大ぜいく

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

熱海日日新聞の
"梅村(けい)"の
他の汀洋。宮崎
等の錄本

白雲の外の月をも入る海の岸まさりの又の又秋ぬり
なほ、長田さんは佛蘭の教師の家の向とを関める
雲の外をもれに一利も無かりけり日の入る方の梯子かな
秋深り、秋けくなの梢もしけるお錦浦見えず中ぬ、
くれて物も珍言ふまといつまでも、を思いせうまきるかんていぬし
られも、せうきといつも話あるやと向ふ、先ほどのいうます人錦浦さいお話
おりとまへぬ、人錦浦さ絵、亡兄、仲湖かすまお奥例りかたし、話
の者を知らぬとも新くおりたるお東、餘人の及ぶ所お此を実ぬ

懐旧録

一日錦浦君の教へて、亡兄れ待ぬ
こと数くりを見やりて、山の形勢を論し、古銃の傳者おとを評
して、引続の軍の時、何とかいふ人鳥銃を放ちしが、逢ふ
川を越て、梢の枝のよりとことに許せりと語り出せり、る例ち、大い
手壊たりしと、亡兄固くを手壊おい、先ぬ兄君のまして手壊おい
をおて固辞の事あり、亡兄と相角ふお、終お一度も負たる事ぬし、
つるを亡兄鉄ぬ、手之こそと相角ふお、終お一度も負たる事ぬし、
受うナ勿体ぬ仕打ぬたる事お相さぬい所て筆を擱おり、

吉ん中納言殿

亡兄長病るて久く床法せぎりけれい、毎当したりしを、兵用のまも
ける也、自ら南窓お出て撰び梅しこく語て去ぬ、時て使来りて書おを
て、再陳情と懇せず、文けい二ヶ条あり、ゆい一ヶ条お巡らぬ物を得り
こしぬ、文あり、受い高価お在り中納言様ぬ物はしぬ
礼と、人ヶ文のの為の愛を謝て去ぬる者也とあり、亡兄帰

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

後日の糸を切ってゆるんとなるを、予例の如く止めて茶忽もしるまか
と、いふ、答て第三番之を信ずるか、吉中弘言敬と言葉やあり、詐
称綻たりとて何ぞなるか一首の談あり蘭渓かチ紙まで
筆の走るがごとく趣る初学のいたりみどりとでいるへかりける
予初めて台りて大に笑たり、世ごの例ない程初の事ですから、雅宴
ありし、

錦海語りし談

錦海語りし談

我れいく年ぶりで三絃弾の薄めつらき音いまわけり、
是ハ鶴峰ハ年ぶりの我れも共に板への陸し弾大すりとなる、文化十三年頃の
春也、弾ハ初人なりや、其人其名ハ忘れし
之の事を明れハ翌の事がかくる事ハ春ハまわけり

こまりくのお湯のみの姫 探ねんころを遠く音の峰、
秋風の吹ハ日ハより笛外の一ト声ハ
まら錦海の自作なるべし、

楽ハ春の若草秋の月 文学史よくこゝを解くる歟、
楽ハ錦のお袖前の河 合ハ有ハ有ハあるなるより錦の号、
牛の角ハ向しかと忘れめ

大錦海の行状

錦海の醫師石井養拙 文を七
人一首のせをたのニ十首をいれぬ
けるお若をケしれ、かけ軸といふ
みける、

雨の向ふと急くせます部屋主、

右い諺お喩りをや、直一と云ひかねと甲斐〳〵め、そを言の中より巧く中るを、
といふ句を、巧く折しもと直一と、諺とこゝろよい一言の上の句をおもひ出
迅次郎くの典り諺が所々あるかと、
て吟味お喩るい廃止から日ト事みれう、此諺所詮論せも、
諺の喜姓をいふ等たりといふこつちんと
姫の離婚を諫む
勘蔵の長女をお慈といふ、其井家柄
て知らぬ才の女也、内政を司る事能さし、旦次となり極めて、
家の女を擇ぶ如き事と申されて、
まく力めし、如何本當者を選ぶも
女二人お出、家の三人、新宅、正枕を生たりお、いつか
初め、唐人お踊て、周郎い父ら道の
こと、一生涯の不幸なりと勘蔵せ
又迭を出めて、人の父道あること幸たれ、
家の妻事を出て陸方と云ひ、父祖の
かる父親お喜び、父親の勘ぜやう上、
お母様を、父親の勘ぜやう上、
お母様を、父親の勘ぜやう上、
嫡と及ぶ、三人のお信息外藏の助
と、夏賀丁寧お勘ぜ、先家の手澤の書
て帰さんと云を聞て、中一年
んでも云る平坦の帳面を見るも
はるを覚ぶ、父家の三年
なの事也、

自樂斎の誤

百升書拾い云とは法名居保三郎とて、神埼の産まの也、生れ時
より両眼共人の異なり、左眼を上の方へ二ツ
に瞳まあり、左眼を見る時は傍向て見
る、真横にて見る時は、右眼を見る、左眼は唯黒き
の字を見る、越前投機を開く事数十年、其
名高くなりしという、人々の参りて享を
そこえけれい、人皆宝目の何字と答えるに、十時は誤ること
なし、天井や数珠の筆あり、長柄の鎌積れりを
満れ候せ、障事にて御想領の生れなら筆の誉(ほまれ)と
書きするを、法師ら事を思え天を怨ーから、守護代お筆の才能信
を以て、習術を修行きるなり、夫婦人お持るとと、常
なき熱望しすなり、書物を能て、またこれしかと」言を出さりを、色々等
めて、心也法せめ守護代ならん云事
県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

才記憶くお持ルー上、古志草一すて鉄ルい、筆跡も
帰りめれを、名を出郡守いな跡と人命せり、夫より橋氏のりお文て睡術を
学ん、又上官お陰て研究ー、お珠お守る功
訪せり、並れとも天性物覚悪く、ある時論の人命ありて行て聴ーお、白無文
の羽向子ぎり、何か宝目ぎるくやとっおえ内を向て、両色大お驚しいな
と唱りめ、又生ぎお、珠ぎお、ある時お枝を出ぎ、重紋人家お通過し毎
毎拝ぎとおそうよめるお、枝を出ぎ時くら処
お拝り、我を宝目人通を、無念也とて、衣たる物を剥ぎんとを、七者よ女猫
を驚と立けりお、お通教導の法い新宮、来りて、無事(ぶじ)ぎ方なく、又
三人のお更(ふけ)早生しけれい、鯨捨の集と大り、撃ちとて志重塚を、ぎる家
お宝政十年申午正月や堂子を生ぎ、極大病を、今旦々お通
れり、当年の秋婚お出ぬし、次大病の家重ぎ集れとも、皆手を取て、頭お

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

土をおて、永城したるおを告れめ
ひけれせ、主人の今たれいいるがおを
迎りめ、女的丑の刻お迎くとき、新
宅の板に西例の字の書よう火告て、
焼捨をおさうめ、近辺の火事い、三年ぶ前生大人慢穿生女ぶ
らん事を恐い、海水の火事い十日ぶ前に自分ぬ、七夏ま神人会ぬ祈り宅中
をしりんでも気せられい、気を認ーたれい、字方泉お理を捨て寝、
せりや、気をでて気しやと同くとき、笑を笑ーて、前後れ十四日お及ーやど
も捨みぶ故を強うさし、ぶ代世間うる方名の門人を迎うれい達ぶ賀
と方彩とを一通ぬ称せり、

一節有膏無之気

晴寿花ぶの七十の賀ぬ宴ぶ客を迎りよ、唯庭ぶの木を植たり
けれい、それぶまんで、節有膏無之気の古事を補くり、遠ぶ客い天性

延引のくたりけれい、更ぬ件借を依せる色新面ぬ顔いれたり、ぜ君ぬ治り
けるい、姉婿めて在宅ぶ老ぶ婦せーい、五年ぬ時や、二年を経て、或旧故里ぬ
十月ぬ迎ーれ、牧清たりけれい間中ぶ行ーて、上りはぬ重り、手ぬて菅廃を掃
ーけるぬ怪しまおこを手ぬ解たれ、両耳あり両目あり、鼻あり、口あり、口中
ぬい歯あり、舌ぬい聲生さり、色を掃迎せとも、人ぬ首とたらでい近いれを、怪し
と思え、強かある牧を持来れと呼けれい、手まぶ立足七八寸ぬ大男、ぬ
夜十時ぶの春ぬ春ぬ割りて下ぶ方ぬ在りい、牧を近しまれるぬ依て富とえた
れい猿の音也、並し飼犬ぬ牧をーおかん、他の女婦ぬりせい驚き騒く、まれ此手ぶ為ぶ新りたる許りを、他の人
い寝へて聖ぬ近一更ぬ到らさり、又昨後中急ぬ母ぬ様ぶれ大病人ありて看
病ぬ付ーれ或る夜ぬ更てぬ用ぬ出り十二ぬ時、月明まることを空
のぬ上、前ぶ述ぶる物ぬ也留風をくとして勢りぬ翳まーかり、怪しとえるたり

み、色白き女の姿を掴さたるか、一行より止、跡れ失たり、様が変お、裏お迎
ます事を、良く久く言守たりお父身を隠れ三三向物へ駆
れ出て来お、裏お迎ますりけれい、静お窓お覗、かる為こをありつれと
絵りけれい、声を聞て大を驚き、夫の祖女を伴、旧軍をこんと抑山数め室
しか室をなりて甘高しまり良くを並とを並せけれい、ら第五男三人許
ら実を連行しとなり、後のお父といっとも知く妙者なくきや、又女後良く、
父祖お出唯一人留守せしか、浪人表を開錠を以、後お追ける、
せがといる、酒を飲せれい、又飯を喰せとこお故、腰をもし前撃お人動り
徐仕させけるお、徐仕の話を祝ら甘、お父と、故ら母を婦向義て、前撃を
喰り、気を付て徐仕れる婦れもしまを、お事頂すれい、アハ方の様が
ありまをとしてけれい、浪人間い足の指旧室何とっこと言と告りけれい、
誰お先言仕を係お許言されといっとは、いやくは旧室の心底が聞たし、何と思

ひて断をいっこしでて、脇の扣を推をけ
も、裏お向へれを、足の唯郎を巡唱して隣錠を引下せたり、祖そと陳列れと
色を立ようとも出ない、色と陳列棚をおむざくとくまわかり、大死仕ていい申訳三郎は
冷蔵也、外吉等之留をおむざくとくまわかり、大死仕ていい申訳三郎は
れい、浦今手お為るがたり、前扣の女鉄砲お巡て持おれと言らか、
お命まれい、異を解とを大銀を活て持書、家表三人棒を持て上り出お
当けれい、浪人急ち就色を着り付、「暗殺をを果ひ、他域の物語りおとしてをや
とお先ひ、他域の物語りおとしてをや
田商を経いお向ち細浪人当み表る、先れい家表との方をかりて、無の
お活りな、今日い掌理務おを招きたれい叶ふくすれし、位とや使刀
通一おい巡を思ふとも、細浪人の方を望みて直行けい、浪人急お
ふと、急返るかさして、持お出て吉他の婦人の及お所お断る

くしい、中が悟殿多かれ共、事共けれい、他は又後ろくしと、それ丈の様けれい、子管理て叔々大膳亮さ
白猿
ある又屋当去まて関る事あり、時春なる幼き時分
峰二入、深谷の流れ清く岩の苔むしたる所を、踊の如
と雪ある多く流れ石をすしかせ、木を尋とも
り通りかれい、雨事白も長く出ず、大い五丈餘りある猿の、眼中強れ赤き
夫れてかい当たり、最常の如くなりけれい、実れ取ても通る事も適時なり
せざる、まれ、兎角当れ心剛わがさしけれい、実れ当ずるく、母のわく水を
舞しなたり、幼猿い良久く謝ずれ、東勘者数徒
明年も猶りけれい、予驚て、直報石ちれんを望ねてか、大の牝十三疑
の廿第十家の時也、去白毛の子猿
8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

きたらし共い、廿辺の宮殿石草木立時
為一かりしやと望けれい、左の為まず
しと笑ひぬ、帰りて先ず母にみれ
却し、凡先是なれ共ず事異の相
れと、幼少の時自撃環像の行事
お先ず幼なかりしの事を語れ
事ずいたま、負真ぶ幼少の
はうまず経やと望けれ由良い先ず
く先ず家の中より初り給
事お人お葬せれ、鐘磬極めて他ゝ事
ゝ左の腐お丈様の白毛あり、汝まふ
三ゝとは、長子敏麿幼名、実ゝ幼

名綺麗、美色中を彩の出るを名の一日おくしあれば
の水内郡地という人、牛地お参りて話をこ
お雛名也、事故すい夢出、夢七ると
夢という名い、また間をを参跨らしかりな、をつなない事お少人お笑し
ていい、唯人お笑けれし事、恥かしの笑を
事を自ら結ぶ事話さらしなり、十一の字造お住と取る事を上げを進
ひーふ、一節切りけれい、家お帰らんとせー
てるを見て、改新さいい、かす、結び
りて、お客ごと内、一節切して地お参
勧るま、仕事を、するぞと問る、自ら結
内祭る一節を結ぶくれ、節七結ぶくれ
事ら、ことあらしとせる事い変と語りし
不語しあり、是い自ら其中で在りしか故か、

天意

大石貴壽寺る語りて曰、妹先人方、盛ま
天降の業を助しを諭せりれ、萬葉竜生い、美眼患二人指二高明温二
神慧、という書しを大書して贈られしか、異して井先人寵ま、かりて於没せ
られけれい、両先生の先見誠る物哲と可謂とのか、勉甘今を以参れい、
徳御翁小伝を著て朝廷、幕府先生ふ子あれまも孫おし、今我大石
の支族の、本宗い申ると及、枝葉のおと、まるを子孫繁昌せる
いう、是ら以見る付い、両先生の酸乎ン酸勉るかな甘をと天意ま
妄ら所あるや、我先人の著後、しいい左所已所遺あまい、鬼神の
い、妄が人の身の上い非論を向数十事也といお、事い一言も不

大石良和事に件不
語行ふ去志華
御ふる秘書せり
御孫かニ字ま下レテ
半守もんん後二
月実田正雅之ヲ守
レん事ふこなど
書き夢御昭和
十三年一月一日書七
事

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

謹啓て奉りは、

天道

海野源相様御父子天道和尚様、常々天道を尊び給い、加之法立ち徒義正直御出の事耳にも快なお聞きて感じ入り、細やかの生れ不仁なる人なりしが、今大国を保ち、天道御心を慰め給いる事を載たり、京都御出の節、三奇実の御話、人物、多才不仁といふ名を捨て、仁義を行ふと、帝の御心を慰め奉りたり、何の天道なりとも御出の節、必ず御立寄り給はん事を願ひ奉る、尚又天道を知る一事を作る者、多かる事なれども、普く神の授け及ぼし給ふ事なれば、終り迄いませ給ふ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

しお、今、唯一物の梦も去りぬき、大中川氏屋敷かいる、我れ無益
の事ゐ張め悪る事ゐり、餘所百萬の後い先生なるく、孫公なのみと
神へしと、之を思ふ、ほ心を慢せしと、いまれしかが、実に既ゐ夢と成
り成、今今大中川氏屋敷れ、新く新宿ゐ張り、両手両眼きゐ痛悩
して治療する子能はず、此如唯へ手を借つ、此如ゐ苦ゐも、唯其形
当ひ第ゐ以上ある父母、及祖屋せる所ゐれとも改めて学事を、
得ず、新緑冷雨を失ふ、ゐ学ぶる所ある一ヶ月ゐ、正ます能ず、後
ゐ心気を悩ませ、ゐ学ぶ人の死を向ひ、ゐか為ゐ悲哀悼ゐ人の死
を向ひ、深く哀悼を自ら死ぬる事能ゐ悲ゐを恨む、然れ共、是古梦
の実一月事唯梦の一ゐゐ事を、
　　村焼実
後ゐ第覚書ゐわけ一ヶ月叶、大江匡弥神、大学士宮殿頭任ゐ、日

ゐ来り仕ゐまつり、朝夕学向ゐ弥心をこらさせ給ふ一ゐ、学政頭任ゐ
ゐ国ゐ事とありて国会ゐ下向ありし、ゐか、弥ゐ弥心ゐ
弥ゐあり、結ゐ
　　外民徳作甘業思　　莫亡心　タ年余月遊
又詩歌あり、
　忘れぬる同じ言とも月をみな、梅ゐ香を井ゐめぐり逢ふ遊
一ヶ法性師弟ゐ情、千事ゐ今ゐみ悪像ゐ、無れとも大内ゐ時しかゐ、
ゐ事ゐり、弥学ゐ母徳ゐ牛乳性ゐし、特り　文照政ゐ母ゐ先生
ゐ教ゐ、ゐ弟ゐ此ゐ弟ゐ研ゐ事ゐ用ゐ、毒ゐ学堅ゐ母ゐ猫ゐ事任ゐ
ゐ事

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

の春吟を一冊にまとめ、故郷の淡路に、帰りなんいざ、
詩をそえさせていただき、治安事務を書き、終わりの方が埋没く
並みのうるおいを、眺めていた治に帰りなん、吟行の
の楽しさ、人事なる事なりとつづり、その五番目が峨々たる
家の前で、子を連れ、撫山先生の講演の壇への長蛇の
お行いまものり、なりを、警官を、なる頃は、至れり尽せり、
また留守中の恩情を忘れ難い時は流涕ものぞ、

流涕

西村長裕の号児と称す、その妻陳きを悲しみ、亡妻の異な
らざりければ、何を感慨おきと同じく、我陳の陳きたり、他の親類
の中で、特に悲しみの幸いにもつのなり、その、一年の内を
同じ苦しみを同じ、その陳きを、悲しみ、流涕たるおや言、但し悲哀を

寝ても覚めても、子供の事を思うて、亡妻を、
いたわやしく、いとおしく、為ち指導の任、
を止げやしく、また又大名の高知の間も、夜寝るのも、
木のくわなきを恨んで慷慨流涕するのみ、
寝ても覚めても、子供の事を思うて、亡妻を、
答え、子供之を繋ぎを父の断腸
自殺の父の魂也、大武の天保の魂也、相当事件の例人の
相隣れる事断のかた、引化芸術の誉を絵の誉を絵のみ。

改元

蒼龍、雲龍、白龍、朱鳥の号、祥瑞の如て年号を立るの例、
元年と号ること同じ、大事、地震、疫病、火災大なる時
年号を改むるの例、年号を以て元年とすれども、甚だ

あらし等を以て流失と書いてあるが、此たび、然しそれ等の事に関係ある事いえをかねばならぬ、因果たき事ながらいま改正の際まで据置き、又新規の帳を設けるまでは、旧帳を、山中の異民の身迄も、引渡相成つまり帳を、引渡相成つまり帳を、山中の異民の身迄も、引渡相成つまり帳を、山中の異民の身迄も、引渡相成つまり帳を、山中の異民の身迄も

あまつさへ、隣の傍き、隔れ私と綾ひ、いつもいつも桜もなく、散りくみありて夜行より外の事もなし。

行燈掛行

先言の如く、今日あり、行燈掛の表、昼は昨日の如く詩り歩行も、なんぞ黒き者なれど、通い多くては、いかなるや、治世と私世との変ある事、酸言の猫と書と夜との如くなるべし、なお注意の勇めも急り、博奕をおち、喧嘩と強い、女あさむさくろくん者、私多い大功を立て、女房を千部社後お店を者、私演女七五まりし、辛労とそも、かる頑愚の徒の中より、過ぎのお才能の士をぬん出事あり、お前の熱意と、諫め私らまんはある へから見、人を殺の様お殺す事なれ苦、平心まて殺、秘策を行ら、大狭い能務者也、古格の頭を捨て新を取れら、別天古格へきの者なく、経を責め、俗とらんすをおひれ、別天古月まへきの人なしといふ。

語お去る人の一楽をとれいれ利を忘る、是天下の事、多き也といふ事あり、尚士能ある者たいから、己が心に叶ふる事あり、悪き事あり、性貪穢嫉妬を含る者なるに、職に引ありて、公録を造て使ふ者をいるが、又己の徳い金あり、之の為に望る事ありといふて、我の周元様のかたて、諸士を敵て女房を取さを、侍ほと主ずるすあり、お人気権世と、いろ〳〵の関井家の仕くしめ、いろ〳〵の借財の名を挙て、侍士一統お刀を一所お置すり、私か面親をはんるお、評判の者お取て、用ひ訴へお、果して大剛の当古也、唐の裴度といふる人の、随の物事小仕くし時に、安諫の諫めを等たるか、唐の大山の事て、忠直の名を顕ハせり、古語お言諫を聞く事を楽めい、別世界も変を安治と

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

金沙ノ書ト相いれざるところあり

牛神を祭る勿
秘カ二年子ニシテ
筆者セレンの後
二月ニテ、天国ニ
改名ト云ふ宮本
ヨリ、若山ノ家モノ
所蔵ヨリ言告
山ノ校ヲ経ニ証
トヲ由ヒヨホンの
ヤ「昭和十七年一月
一日後

不詳しあり、是い倒も其ヤカ在リトカ故カ

天言

大石蓮斎予ヲ訪リテ曰、我先人方、盛ニ時、父ノ傳郷翁ニ、天降ノ詩ヲ綴リテ訓セラレ、蘭蓀先生ハ、美作患ヘ指、高明通神悪、トニ事ヲ大書シテ贈ラレシカ、果シテ我先人ノ病没セラレシカ、両先生ノ先見識カ時指ト可謂カ、魁共今ヲ以テ若ルレハ、徳卿翁ノ経ヲ誉テ励ト、蘭蓀先生ハ孫ホーイ、今我大石ヲ以テ孫ホーイ、是レ以テ見ル。

叫ハ、両先生ノ聖乎ト、酔フルカ如キ者ニ、天ヲ言ハ及ヒ、林業ノ事ヲ子孫ニ勉メサセヨトノ如キ

天道

謝啓 物狡な天道形り、善き人の誉れと、大道為たり難し、かる情ふ正直物の宮形なりトか
とす為の至りて困を失くり、細りの世を恕れの仁なるかが、今
大国を悟り、天道独お雑れとい記事を載たり、ヲ中細りの世
祖れ仁方とい記事を載み、忠孝三義ふみい記述たりと、ヲ仁たり
誓、寿命が猪株も合たり、その仁たりと、ヲ仁たりと、ヲ仁たりと
世程びくお、未だ大それお仕けれいが、父母兄弟の天道
鬼神の猪お及ぐり、ヲ中ヲを得りヤしてお、徐り返いてせ皆男でお、益
斎国をもまセ、我時柄猪たしをいる者が天道をおるまで
と、ヲ延ぶお前ぎ、ヲい性細りの世祖れ仁ありと、ヲ仁たりと、ヲ仁たりと
迎まで語り出ぶ形く矢張ヲお前しけない、神ふいふせない、お柄柄
鼓みとをかる去年の、天道を殺ふまでとくるすい、天道をいるい、石時神
柱ぎれいい記事を詞が、子ヲ方さくまで、夫なの天道をいるい、石時神
而倒とくり、ヲ中の論ヲ事ヲ事ヲ事

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

十三 玉が傳を補ふ

安里大根物語の續數年を經て、先君子給ふるに、こゝを心安くお暮せるさ、及古の中より詩ふり、葉中和尚山十を越え安月臨日老年大病に三年えいおれい沈疾九旬文、筒ふ金銭を惜て、父の湯薬の供事を載たり、中事筒の十を越か傳ふに、今日の能せり、其父日々百銭究精へ出、半を以者を訪ふ半を以阿磐おへて阿を買、迎在の老母社會の音無と相助て強盗へ入、其時阿五今の傳い五十古及十一と云、

山下剛珠先生著

貧地ナ山十八ヶ傳

今里大根物を著したり時、故あり今實ふ錄を、本安の奥ふ貧地ナといふ所あり其所ふ實八と世ふ間へ七ふ奇傳の二古

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

り、幼少の時より放逸無慚にして、学問を好まず、書を読むことを厭い、時々師匠の家へ行くことがあっても、机に向かうことは稀で、いつも外へ出て遊んでばかりいた。

ある日のこと、父が用事があって、私を連れて、ある家へ行った。その家には、私と同じ年頃の子供が、机に向かって、一心に手習いをしていた。父はそれを見て、私にも手習いをするようにと言われた。私は、それまで、筆を持ったことがなかったので、どうしてよいか分からなかった。すると、その子供が、自分の筆を貸してくれた。私は、その筆で、見よう見まねで、字を書いてみた。すると、思いのほか、上手に書けたので、父は大変喜んだ。

それから、私は、毎日、手習いをするようになった。しかし、相変わらず、遊ぶことが好きで、学問には、あまり身が入らなかった。

ある時、父が、私に、「お前は、このままでは、立派な人間にはなれない。学問をしなければ、人間は、一人前にはなれないのだ。」と言って、厳しく叱った。

私は、その時、初めて、自分の怠惰な生活を反省した。そして、これからは、真面目に学問をしようと、心に誓った。

それから、私は、人が変わったように、学問に励んだ。朝は、人より早く起きて、夜は、人より遅くまで、机に向かった。

その甲斐あって、私は、次第に、学問が、面白くなってきた。そして、いつの間にか、学問が、好きになっていた。

やがて、私は、立派な学者になることができた。

父は、私が、学者になったのを、大変喜んでくれた。

私は、父の恩を、決して、忘れることはない。

父は、私が、学者になってから、五年後に、亡くなった。

私は、父の墓前に、学者になったことを、報告した。

父は、私が、学者になることを、望んでいたのだ。

私は、父の望みを、かなえることができて、本当に、よかったと、思っている。

父は、私の、最大の、理解者であり、最大の、恩人である。

私は、父に、感謝の、気持ちを、忘れずに、これからも、生きていこうと、思っている。

父は、私に、学問の、大切さを、教えてくれた。

父は、私に、人間の、生き方を、教えてくれた。

父は、私に、多くの、ことを、教えてくれた。

父は、私の、師匠であり、父であり、友であった。

父は、私の、すべてであった。

父は、私の、誇りであった。

父は、私の、目標であった。

父は、私の、憧れであった。

父は、私の、尊敬する、人であった。

父は、私の、愛する、人であった。

父は、私の、大切な、人であった。

父は、私の、かけがえのない、人であった。

父は、私の、すべてであった。

父は、私の、すべてであった。

父は、私の、すべてであ

事なせば、今般其許と私と共に一番隊頭を承り、共一番隊を率ゐ古い、共一番隊を率ゐて決死隊を撰び、
敵地へ乗り込まんと言ふ、何吉夫一興ずらんと後ず、宇八まず其の許撰を撰よ、我
すちん、一二三の目七の目七の采配とし、四五六の目を振り出の目おければ、即ち要
を撰り出の目おければ、即ち要目を振り出の目を振り出の目を振り出の

北共は笑たのうしかい、碧二年五月より疫と痛して敗て出を、勢りお乳書
を書ること凡五度お及で姓清勿ないけれい八月お妻を長堅士のう大
庭官の許お至り彩の通り何分ら社られまと請、口降伊故笑つ帰るへといへ
共いや〳〵退候は契を世に内り出の社を急す帰より彩お入る
迷惑一たる所を勢かを、鈴会せを、降総方熱色そと就様せとも、出
彩の通り何分ら社伊こい芸ごし、左もたゞき内い、従等は住るとも、出の社を
繁すといふ、降高花彩内も詰方むく出い役栽場色すなば何分す
帰り伏候へと堅決の詞を出しけれい、断ら降ぐして時方の帰りたい、先段
佐兵衛といふ者の女を娶りて一女ある男を生めり、男子谷成長したれい、五人
を寄て親訓さる様、凡お栄頃相待迄果ぬ事る迄、可き迄る物、坊
計て降たない実様て実ふ者ありより、自然と手お入たるい、彩く私共しまり、
如斯重なるすいて五両永と丁寧及乗して前めたり、中年の修耳聾

したるが、仲事なて受れ村望の様御伊翁の所お来りれ、修保前、耳聾
して私向なくしといふ、男ふ五伊自由なす方、及って大ねなと云、大ねな
とふ行被をと聞くふこさん保一可の
述お耳の大ぬれい、或の差か為ふ恐れ、或ふ差か為ふ怒
り、急豆の事ふ色々心を悩一ぬ、一可驚てより以来男ふ中の姉又ふ
お聞せ及ふいたふ事い、旨寄ふ、勝向保れい一可位ふ及ま、来ふ書て
相ふ出外ふ聞れ及ふ事たる聞ふか大ねなといふ、少ふ事て修御前の
日出志人暴志ふの旨を得たりといふ、来ふの書ふ気常急とふる智ふ、
又前し能出の面を新たる、夫と急伊の石迄を警記事ならんと、玄蔵せ
られき、明和元年巳五月ふ八ふ五日ふ三十七ふて前ふ孔ふて、頃ふ差ふ
又右馬五十一、頃ふ三男四十七、頃ふ二男伊八四十五、頃ふ十歳、末男孝平四人ふ年
を新ま、少ふ急ふ康他たりふ八月ふ四ふ長等駅とふる高くを呼、我

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

等近日ヨリ、カラ詐ヲ仕張リ、金ヲ
借ル内ガ所ヲ、
布子一ツ稽一ツ質ニ入レテ活セ
ルヲ、ケッカノヲトモ思ワズ
偽ヲ学ビ内ガ所ヲ、牧野銀七名ラトイエタレバ、セビノ昌ガ方
ヲ多ク拵タリ、ヤガテ五ツカヤ十名五分ノ利ヲ
取ル事ヲ、永平申分証文ヲ認メ、廿ヲノ勘定ヲ
誤ラセ、其ノ上ニ五人ノ子供ヲ呼集メ、我今
特徒ニ来ル、汝等ガ云ヒ分ヲ聞ク事アリ、汝カ軍帳ヲ貸セヨト
申ス、依テ軍帳ヲ貸スルヤ
否ヤ、ソレヲ受ケ、取ル事ヲ
ヤ否ヤ、即チ悪ノ会部ニ入ル、ソノ根ヲ、悼
ミ、ヤガテ来ル

の書置あり、其文左の如し、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

願を掛り、神霊不思議の霊眼をもて、世々人の禍福吉凶事の有無、治世の人越死人の臓腑を探き視、形色得たりいまだ嘗て其の筆の才の及ざる事なきのみもあらず、行商おこし、かる移人世事に疎く愚なれど、刑罰を種くし、張ばい甘言を信ぜず、お言い惑わされ、事に仁術をもって思い施すといえども、治療の為とは、何時迄経ても治療の為とは、何時迄経ても治療の為とは、何時迄経ても

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

書く暇なく、今日お棺に入れたり、清書を返したり、又同じ事を返したりで死ぬ程忙しかったが、私も心おかなく、何となく気も晴々として、嬉しく人間を憚り、恥ずかしく純女の座を参列を、私は勿論お助け、古里のお母さんに、しかも、今宵は独りと思うと心細くもあったりして、脇を歌ったりして、脇筋よりさきくるやかに、私を導いてくれたり、色々な人の心の当たり、有難いとも言う可き事もたかりけれど、又目を塞ぎ心も静まり再び閉じられた様な気持で、そう思い返り、聖母様も御喜びなされ、大きな安心を胸に抱き、お母さんと一緒に寝ました。

翌朝、私も忙しき身をそそくさとお発ち、又々何事、純女と初めて語らい時も、江ノ島を名仕舞に急しまずさた懐かしけれど、遠方お帰り女の女かと思いきや立ちやと同おくしく純女の死したるを知って、今悔くみ

為かりしとそれ、鮎かい彼女が海岸より東京へと帰りしと、私の迷ひよりかと悔しきをそれ、時私物住文の事を認め自らもて何事も捨て、誠の御方を探し、狂乱なる三日間彼女の亡霊を明るへと申されけれど、何事も手許て帰り、私の為へしなくせしお倫等の怪しき事ありて、事に戸和歌き女房を娶りまの婦共康他まて記

金剛水

尾呂志長徳寺の井の金剛水といふ、名僧私後此寺が住しけれど、此水濁りて飲むこと能はざりしと云伝へし霊水私が住山の岡の泡菓私備

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

親への孝行これ又向後篤と改心仕るべし
一頁を捲ずれば人の美を以て重き字、描きたれども、是より悪行枚大の改まり、父母の手を煩すまじ
感ずるところあり

一休萬拝

屋生志萬多郎の家妻平左衛門いわれ五人七八まで許りの子を挙りて後
懐姙せしや十六ケ月すぎて男子を生めり、生まれおちて歯生えたり、髪黒
くして活ける如く、その初産にして手も全く第たり、神仏いと霊助と云ふ
宮を深しの上手造り上りて進んとき、平左衛門喜び限なく、即ち
せり、時秀石宮前で、夫いわれを宮たまやるとも、阿母堂のの如き
者か、外聞如何や事悪いたらん時は、いつ如何ばき吉事あらんと
悟れけり、夢と多年相悩みを、救りて死せり、平左衛門を

聖らを、後人遣ーて一休萬拝と物表、ふか彫り所也

勧請

昔安藝氏の婦、姓名不詳なりて山伏あり
の人の能く祈念あり、安芸の獺山辺より勧請
嬌婆を迎しまお、嬌婆姑て姉子おいうく
後ろの山、変りて刀を石といふ、赤
乾中勧請か事なり、勧請の南面内
お宮勧請事なり、又化ろ年代長ろ
内陣壁たりお、勧請の宮造也、手水鉢の据
ご事なる為也い、儒家といふく部て見る
おりんえを、仏の神業なる事を假初の言
うくおいこい怪しとをこれをるれい元の如く仕へ奉らん

と怪めサ、なっくを遣いて日暮れ
甚といお、歌星お詰て歩れい、皆勢
ま、判合律か型博文なも内何くて来り、東西南北を人を遣へーと、御引新回
乙型の涙したと同じ拙也共、左様の人い涙らるとしんーかり、引寄海事お
と拙し求め、丑の刻す時けれい、皆単独と一ぱ帰りて何を飼、餌を嘴し
て伸子お、急ち御おりて居御めなるを、中る為性ーおくしとて象お出
てくれい蔵の衣の端お人おりて、前へ向て三たり、奇ち井取り、奇し詰りて
急きおい、急ち井お附/きおり、さい奇切ーと、相呼りてくを集りたれ共増
みと思れ仕、主く様おかしおお、徳宇、皆幽土蔵の宝を砕り、手を
伸して終るば皆の統目を取り、引き内お入れ、角を取、拳を等て
勘定が目を走たかおつ事三郎しけれい、注しを連帰りてくれい、皆に
元結の結目おたり、髪手石おます物脇の第薄の袖、一向のつま、草

脱も石おれて有り、女遣体ませたり
の後漸く正気迫りて、行角往り女たり
山伏かまりて、紙と行くレとそ、手を取と
一拝を撲つを覚ふ皆ます事行くレ、敵
りとい、社檀の右横、後の気色を往
の宝の蔵を接附、鞍馬等の所れを見
也、程降りとき所で乃せから也迫く共、
とて鞍馬ち唯一ト北お飛帰り、向への
勢陣等練の設施あり、女を見れい体を
引もおま、精おく有て人の出文ト横おり
けお山花の上ち走ったびーと給りぬるの程き見お、使お二ヶ時和の間お、新く
所々をやいま陣おり田陣あり、先ごろお七ちも利当御へ往き、五教しくれ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

[illegible]せ也、其時ニ十一才ニて獨手ニ[illegible]
[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]ニ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

また、小平治の遠かたたれい俳句「望くるし日影をいれい、早西山お過り
ぬ、家お帰りたれ苦、柚子巻りて人見入れし、宮お詣里百歩あり、後第お
る婦人近寄お在りしが、頃ろか新お妻、けいから老郷色おしく見ゆるお
行事と伺お、集会お始る頃お婦人も主おいまま、漁師も安人も張ら
また、朝仕舞人動く人お待りしを、くのお待を正さんを願し、神
集せ一列、両拍手、深々お拝を以て終る也、
雌鶏紀雄
文政二年で知三月十二日夜より今日七月五日の雌鶏化て牡と
たるおめに性異る者のごとし、かの家く忌嫌事で、飛
の前をおけれい家く忌嫌事で、飛
ゆる珍らしきあを何故猥りお申すべきと伺
候て雄て見る者日と止まり」此お漢訳保次郎て見る、今の清春

いおなる雌鶏の時い赤冠ありしが、
や、他の雄と戦合せ、雄となり、妻の雄
妻て本の性質となりれ、性転計り
と云、

獨

延享の頃本林寺の僧ちの秋お大牧信て人の妻を誘
皆奪ある男みい三人も連立て行けい、妻を
婦女をい侮りて、大勢打連立と脅し、妻を
奪取る、人多甘かるれ共、皆を恭しく多く痛なられぬ、大平岩氏
の使ま江戸へとる者あり、翁同行の旅おりか、戦等禅の親旦、僧と
て、御妻の事切を告やたるを持し、性獨り通りとお、御供出て大勢ぬと
なるを、投おお断拒いかで水めず翁同お当りぬ終て此地方も関係て影
しく強て見物せーとて、此猿い漢ぬいく獨、私名い一疋猿と、後の別録也

と関ぬ、其頃の殿士のみれ来る女の、やうるまりみり、

吉川検校

吉川検校い天満与異夫の子也、七歳ニて物を失ひ、後清市と称し、新
堂を住家して昭今三味を教く、予が家ニも時ニ歩へせり、女四人ありて志衆ニ
異たり、晴春花ニ尾を売り、兄弟姉妹相集て、孫氏伊勢等の物
語、或ハ漢ニ今の事ニと許話ニ興を催し、或ハ三味の指ニ合ハせ、人々口々に休
ニ三味の指ニ合ハせ、人々口々に休ニて唱ニ興ニ入ル、こゝニ
ニ寄せ、ちんの頃ニ都ニ又来れりといへども、三味の指ニ合ハず、休
みニて其儘ニ物語の指ニ合ハせ、人々口々に休ニて唱ニ興ニ入ル、こゝニ
さ検校ニ盃を勧ニ都ニ又来れりといへども、三味の指ニ合ハず、休
を指ニて琵琶を奏ニ、一ニの調を待ニ神前ニ敬ニ、
四つの緒の調ニ合ハせて宿業千仰と祈ニ神垣

最寄の七才の時ニ盲ニ、吉川検校ニ従ニ琴ニ
語りしかハ、大ニ喜ニ、我ニ志ニ、能ニ覚ニ、
ニ相通ニ、検等隊ニ命ニて集中ニ書かくしむ、依之衆ニ
伴ニ、何か語りけり、皆ニ読ニ聞ニ、勢ニ四ニ思ニ、
都ニ中傍ニ有ニ杯屋ニ、三部ニ出ニ手ニ多ニ、七月ニ
ニ心ニ入ニ、大ニ勤ニ、
ニ寄ニ所ニ、三味ニ指ニ、
く作ニ曲ニ、教ニ事ニ、常ニ
有田ニ者ニ、
せんと、詰ニ従ニ、
ん、出ニ、
十五ニ、

らざれバ、彼ハ決して言ひ合せおきし如く、なほ一層はやと思ひ、新宮を出て有田を指して急ぎ、彼地の名ある商家へ向ふより彼の者ども、何より彼の者ども、何ぞ清吉ハと訪ねかけ、互ひ手を取て喜ぶ事限りなし。両親ハ彼れとも、報文ある者ハ早く止めよ故、急ぎと両人を招き寄せ、清吉を迎ひせしと語るに、清吉ハ堅

諸神祠の縁日または、お宮参の金銭
又良く、御霊の高く敬い給を
敬うと答え、外時きり挨拶り
りを終を言るたり、お社他拝
書物あり外れい、手紙を見い度
回転り鈴鳴たりと答え、大声
熱障先生

無障先生室明白い、新宮お在し時、
お借室前台室と共、幼女の時
を取て終日日参祝花の所
後い、新後の所までの長術の由、
山生来りけれい、答く恵と話とを書
実お百人の僕と歌の上の句とを書
くこうるお答してくらぐんなお、右向人
い右向き、右向い人い右向き、仰向
しも変事あかりとを、答祝儀
お遊び、上人の左向きて、横向
ル当物の重い処お乳ぎけれ
以て申訳しはさい、皆い我心
又も、不幸金極、急度れ
左、両人幅りて止人の左向、
式を知らせ、慢りお用を
いいえ、先をバニ方はやと、
ま、親しき友関を両人の給金

AVA

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

いたる迄樵夫の帰りの、所々に（燃の）煙の昇りたるを一見せしに、早速其傍に、如何も本信坊と覚え、赤々等が大抱の美しい墓石が建たれ、しかも之と併立て、俗に言ふ、従五位勲六等の墓か、直ぐ様此石碑の表面の本山を写し取、其の左側の本寺を写し取、其の裏面に、施主の姓名を写し取、且つ此書生用下の為め写したりと云ふ、たれの墓石と云ふ事も知らず、唯だ珍らしき墓石なりと思ひ、多く写して置か、将又の為めにもなるまいかと思ひ、其の儘にして置きたり、其の後大抱の帰りしを、従是迄の分仕上げたり、三年の後大抱の帰りしを、従是迄の分仕上げたり、三年の後大抱の帰りしを、従是迄の分仕上げたり、三年

吁面碌石、砥聴我言、去冬一海悔吸中、鉄日
連夢寄、云新有情典此情、何解諏確石之有精霊典、速遥
午本ま、石筑摩鉄如言砕耳、俾無聴有精霊笑、陽急々
如律令、

と唱しかつ、幸多ル、妙なる我、ヰヤかがと超古な鉦鉄まもげらくと
誠ぜ寵たり吾れい、懐天寄云石斜、祇川和尚よい数々の布稲荷な
い、家ろい烙印を点し、神宿を離して、牛の十疑思を祝したり、仰寵石い
深く牛と鍛とをな誇し事を耻あいとや思えば、ナほい英の鉄器
を持て通ると鉦、又年ぬこのたまをかと思くるか、頭て吸宮等さるお因で嘗
大山お登る迄、女性の国立をみせりと
一説大お後倒せしなど

南山紀行ヤ字

雲筍南山紀行を著し、序のを相手さあ
お固ト雀宮の人とをりを知れい、書中の認
先生の高すれ、墓参りの我まお、ご中お
也郭せしい、一ヤも改宗せず、ヤ苦行
子か借書を勧め貸り遣すをと、自ら
てんすを祝り、富元先祖以来古頼
一部を貸り受く礼御て、其ら日自等
し不猶止仰山事をかて稗紙より実礼所
ひー也、後ト先き雀筍事お山本為る息お、無郎の半井り内向書
たる学者なり、我い例なる学者也と、それーお、南山紀行の序を乞る
かばんて、無頓の序井紙を手掌の上お旋題せしと申さんとする山住
漳蔵寺お借りい、先生脇年来故紙何を感云、ヤる時導父の書

仮外律山の儒臣藤澤清造全集第
後隈本の古刹、平日錄拾拾古無特
刑死の山を徒き、深く悔恨を、手
を拳闘て、拘出陣して、終く高り廻り、お商の縁頭を像
者らすま、帰陣の後、井師宮お
該由申れい、方師の回、夫ら種の事
きや、理屈も秘事も文め事をもと
大抵当男の子孫れり、事孔子
方招の英雄あるも、又回那
せま、姓氏の今縁志なるかし、
士い、此写真の拾回して実を

又曰我日本いにしへの神代、日の嬰を以て
めたる皇國の名俗七ツ緒おを引き剖り
おめ玉言秘密おを以て人事繁多なるに
まて孤立すべき事ありても孤立の秘事を設け、孔子の秘傳を會得し、何と
士の志業を成就すべき、中古多き、中古多き、
り數多あれい、志おおおい、傳授も早くい
事い、ひく人志ざくい、修業も忌りい、
いい公家おれい秘する事もなるべレい、
勿き事の法ても大なる業ありみあや、
方ゆえれい、まい從き事こそ
角性を知る事能いまる態ても
廿十五ヨ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

と竹田畳屋行き、
高安平兵衛ハ、二平山素海、おめい京都の使い、石田筆元を作りて被行せり。忌諱ハ潮る所やありけん、此者切腹ハ、大坂まで江戸仕き、牛人のかせ、並徳二年死を第つ十二歳、法名玄心二階堂好斎という者、平家主計頭の孫にかりて得給せりという。
東山殿の頃、時の落書といふよの有り、其中ハ京都四条道ハ、人の知らぬ所をかり行事ハ、無礼なる、人の知らぬ所をかり行事ハ、無礼なる、人の知らぬ所をかり行事ハ、無礼なる

を切る、

風仙花の一本、小芋根とも赤黒焼をかけ二味御
ますて妙を角中、これとげぬきの元法、
神功皇后三韓より帰朝あらて、仲哀帝御崩御敷田といふ
宮の神誕をあり、誕神天皇の幼名とも、子女殺給ふ御
ませるに、弟王誕生ましますとしるし、子女殺給ふ御
を以りえの手振りしられいう妻安しとあり日葵よといふ事の想宮
五十鈴を以て古れい妻五を早めの元薬や、
誕に文明の私の、朝廷衰へ、九州の内裏にて、皆女なと人食まく三
しかと御ふ、ゆり粉を油にてちりと者日々振小ますぶべけます、皆
留かちんの香物を香こりけれい、信玄の女幸連粉とも称言ませ、か
ちんでせおそと中月を呼けめけます、言かもりこますかちんと呼

と聞ける、いつとなく粉をかちんとい
傳、京跡ありといふ説にい、亭跡説合御ふ来ら、
香を数新聞く外気奥お香こりて、本所をかち粉しキは外大根葉
の塩お浸なるを聞き、又香を味がの島の別りて、所を外つ事初めの如し、
何て香のおと云ふ和しといふ。
お盆といふ事、中古より有る事如、中京康富記お京鑑四年正月れり
人う時皆外の祖霊祭の精霊棚や、皆祭前測、
の飾の色お、瑞花表帳子註お回数を算るものを付すも帳子
といふと有り、
御り儀仲宮の仏事お日山盆と、皆の黄人色色の人をいろいろ、又正の
比い、盆花といふ事を著上前様といふーとてえらう、西国大手元者、
の九、廿二日の色後の晴立戸外道宝、大方当お鎌の家者、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

獅子書林を誌したり、ある人曰く、修辞等、毎事、時政道益なき無駄事、歳月出費にとあり、女中の稽古等とあり、馳走といふ事、今、郷曾徳の事か、はた又、貧事、時世流行の装束等、多く数を費やす事、時勢を移し、又、年々変化する事、物ごとに、やくあるかたみる事、一つとして、人の心偶象の頃かとて、此両の言論、皆、いつも嗚くしめてみよ。以の徳ある賢は山階春の下、年頃鳥のごとく、

ゆといふ諺ありと聞く、十寸鏡も、高きに、いつもみよるといふ、是のおそれ

といふ訓あり、又古書間集おゐ、月出ては賢せず、おのれおあり、人する語ろなき時詞ありおゐ、

下ん路姫の諺おゐ、玉のみ玉はや、山室神天皇の時、益女の諺ゐ帝御機入参はや、聖徳太子のあるき玉はや、小の君はやみるき事ゐはやといふ訓、逃事徳妙の時もあるとぞ、

國の富栄せ、百中國の女名いお事オ日十第訓うし、日々手習ふ

通ふ、女童の修式事、ゲにより、お事さんはやと呼ふ、花の様上か

間ふ、貴お初を設茶お古語猶残りけます、

古銭鑑

文治故年筑子おゐ日女の足、神事時、龍宮時、

今野、孫らも焼失新事の南例より南に移りゆき、お前金等をもち、先ず
まづ初めの居酒、寄席を始め、門十二月、こたつ、到着しお七十三の旧類
焼お罹りて又山野に帰り仕を、ぎは仕方なき次第なれ古銭を数十銭集め
ぬかくて百文お遣ゆる事、初お始めて文銭の向お在りしを出しれら失ひ
お望事、おとりかけの去備を除き吹より銅五重文に改まり十五重文に改
しお十二月十日お堂三輪ばの挨拶る個号を買い二百枚先づ漸く八十枚
接受れい、遂く古銭せけ代い、他候の銭を打揃て漸ぬ、市先事務を
所より帰りて増北堂件事を強ひられい、事お始めて文銭の向お在りしを出しれら失ひ
ぬ元より新お銭の種性をとり合て、背面を新に横宛を
るお識のなんたりけれい、時勢て無双を、百文の銭十有八ケ有りて旧き
手お始る事、あるおりといふべい、又百文の銭義あくまでを任せんお、新銭せ

まして殿すまじ一ついお通仕せ一ことい、実に大事とおもふべい、又先より一両年ん
きろうほの時お待ちて、亡兄とお倍りせ一お四五計
りる時お生をこそ事を記してお出て、亡兄と相談して、
急一日を、あんとも過週日内、本社の向い通入りぬ、亡兄、新聞く時
銭をし殺すれい、急ぎ仕を取ると、くに逃くい我国お去らんとい込し
お出発七ぬ時お生をかお前お去る事い実に
行時は、亡兄と市とい数滞国を同くて事い南お東皆し亡兄の中お東皆
父お三人一緒を同しうて、次の南お堂と仕舞と帳を同うて情、亡兄膳
おへて、未だ秋お尚てやるお急ち物取りて解を喫けれい、お物お
けるお、お堂国て又れの心よ左物お国
とい込のルルお、又山寝んとせ一お、再ひいたら
とい込、北堂を警き、燭燭を物て来りんるお、書の時物より満しばる

形して逃るやうな、七兵衛火箸を以て強く押へ、蜘蛛の滴りをそこへ塗るやうにもみつけ、蜘蛛の脚を冷たくもぎけれども、気も色変して死したり、七兵衛は、これが勝として私を捨せんと、節まで、一と時を放んで往ありし、草履を懐中へ、入れざりけり、他の七兵衛くわらを向ふへ寝るも、筋の工夫で逃なかを、私帰るを待てゐやいや、蜘蛛いやしい、世間の奇物怪談多けれど皆嘘と古銭の変ぎたるうそ気ばく、まとめぐりて、10年の年月を経る事なき物と、いふべしと感服られしとぞ。

蜘蛛

薬研の上なりけるお話けるい、薬研お老牡猫あり、元朝を明け、鉄の薬を刺すい会て、合子、小物を皆殺し、あるがままならば、ま

ちんまり死を、一お中殿を詰めり、又大蜘蛛あり、時に洗い翔る、甘未品、蜘蛛の絶えるや如くなき地を真ん、掃女お留皆逃て恐怖せ、金のおのことやかい、蜘蛛屋根の上を伸び駆りあるころを、こたくく縛え、優悪として逃込居たりし家お、彼大蜘蛛を攫み芝お人大の声を以告て見しお猫急ち地お捨たり、蜘蛛を脚さんと急れ共、蜘蛛を恐れて敢て近事を、其内お明り雪の着雨三人集ると進み合て猫を見のお、既お死したりけれ、等て村人のお、を見て彼蜘蛛を亦自殺して地お捨ざるお解すお、おかばれて陽由二尺許り出て有り、些のお猫の死を知らぬ間の村の措お止りておーも驚かず、些お猫々ゝしーも驚かず、悠々ゝ蜘蛛を取て十七足有りと記りめ、こ其時十二歳馬やと、人を試しめ、凡村を廻ると雖も、些お猫を噛て凡大丈夫の能く大事お挙、一脈を恐れ、気魄を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

七年の忌辰あり、客くい錦陣の精霊棚をお設て霊を勇むるやと、お出事を思ひ軍おそて天明るを待ち
慶應元年七月十八日 春秋生年四十八
十二日おまりて功を了
辞世
無量壽ふかうえと花さきて無量壽寺の私地の一角みな勇しかい、花下にて無量壽寺の私地の一角
おいなりたまし、勝円の時分なり
半ばを感を、終病床にて

不詳しかり、さい角も其中ニ在りしかゝ故か、

金法ノ書ニ増いなきりとなん

天言

大石黄寿手ニ語りて曰、我先人方ニ盛ニして時、父ノ徳卿ニ対い、天降の牛神ニ二ありとの説ヲ聞ク事甚だしき後二月ニして大雷ニ打殺ル、今ノ天皇ノ先見識ニ明哲と一ツ謂ツものか、勉共今ヲ以考ルニ、徳卿翁ノ径ヲ詩ヲ以テ訓せられ、論語先生、孟軻憲ニ人指、高明過神悪、と云事ヲ大書ニ掲られしニ、果して我先人罪ニ落ルニ至ル、是ニ於テ仕方ニ出ニ志ヲ改メ、学ニ志ス、寿三寿ニ人ニ教ル事多キ、寿ノ為ニ益アリ、其仁ニ当たり、其仁ニ当たりと云説ヲ指して云ふと云ふ、思ふニ、神の降ル処ニ於テ大石ニ仕ケルハ、父よりそれ集りそ、例の天道ヲ齋日ヲ慎ませ、我等何様ニ生ル者ニ、益と、云ニ於テ、ハ、ハ、ハ

[illegible]
山の投手権二就
[illegible]
[illegible]
一日後

[illegible]
養て馴と、蘭若を生ハ子あれとも孫み、今我大石の妻後ハ本宮
、申よ不及、村葉のまゝまりも子孫繁昌せさるハなし、是ハ我
ゟ、両先生の醇平〻醇まるか如キ者ゟ、天言ゟ発る所あるか、我先人の
寄後一て法を越、触しも、天言ゟおいていた而已所違まさや、鬼神の情
おゟ而已ゟ者ゟ指ぐれゟ、妻ゟ人の身の上ハ推て可知、事也といふ事
言ゟ不発、種點て居りゟ、

天道

御師様天道ハ無私、善ゟ是ニ福ゟ、悪ゟ是ニ禍ゟ、古来人情ゟれゟ、
天道善たり悪し、ゟまゟ悪ゟ福ゟ、善ゟ禍ゟ、細ゟ事ゟ至て国を定ゟ、細ゟ
大国を領ゟ、天道誠ゟ発れゟ、ゟ天道誠ゟ発れゟ、ゟ
ゟれゟ仁者ゟ、ゟまゟを妨ゟ、悪者三奇ゟ、ゟ天道ゟ、多ゟ
善、者ゟの後胤ゟ合たり、ゟ仁たる後ゟ、ゟ
ゟ程ゟ、未ゟ大ゟれゟ仕ハれゟ、人ゟ、ゟれゟ、例の天道
鬼神の情ゟ及ゟ、ゟ中ゟを待ゟ生ゟ、ゟ、ゟ
齋日をゟ、ゟ我等御先祖ゟ、ゟ天道をゟ、ゟまで
と、ゟ、ゟ、ゟ

所蔵より寄贈
山の校正終了に就
よき御注意をも
昭和十七年一月
一日後

蓋し嗣と、蘭蓀先生いまあれよと孫
い、申すまでも及、相似葉のおのずからを子孫繁昌せざるまいかと、是も必ず見る
ない、両先生の膝下メメ酔ふるが如き者を、天言も庶
幸後一て法を誡、酔しも、天言もおいて
拙き通釈を指ぐれを、妄りに人の身の上い批評を問題事せといふ事
言も不敬、極點て居りな、

天道

御歌拝読、天道ハ実に厳しく、善き人に幸
天道あたゝかく慈しみ深い様に、かゝる法則正直御者の当然たるが
とき言ふまでもなく、細々の事を見くらべ、今
大国を領り、天道神の経綸といふ事を載たり、其中細々の
孫を仁者とするを始め、寿三奇、などの条件多く多
善、寿命の強弱を定たりといふ説を指してゐるやうと尚
思ひます、本々大それた仕けれい、父母それ仕業そ、例の天道
鬼神の使ひ及ぶ、終り近いてせり果そ、益
齋日をもまもせ、我等何様たりとも争ふ天道をあざむく事
と、そこまでおかゞ、まい此御の先祖のおかげと申ます

昌世ハ心経とて善人あり、女数息災諸業百の立身作業や山家屋の源左エ門い家を
保つのなどと語を何故ぞと問い、新吉等一の大船を作り事を自慢り得意る事
高嶺故、九ツ家造、り築山泉水など至てすべて一倍おゝ広て第一ある事を古今、
よりの事とこゝより云傳へる事やりと謂をれい、源左エ門聞き敢を、秋等
が所い之の異千石の船を造れい千石の利を得、別荘淀の北ありと謂
嬉て仕度く大きな造るや言ありと、ひゝ、並び数
今あらばと、五百ばか、詞」を剪りな、座敷ハ広く極てもし時々無き事を飾るお祝れい、物語といふ人から、人無
し、哀へ極てもし時々無き事を飾るお祝れい、物語といふ人から、人無
の物語もあるとて、天道鬼神を論ずる片腹痛たく覚ます、中
けれい、並寿齋天道鬼神の事をいはん
とせれい、扨そつ述いは悟る事れ私もなく、いゝえ、扨々凡夫どものいふまゝ

七年の忌辰あり、昔くい錦溥の精霊拯多お記して霊を通ずるかと拙山事を思ひ寓して天明るお召りぬ

慶應元年七月十八日 芥舟生 筆

十二のお里りて功を了す

十六 病癒

無量壽寺ふえとい花寺あて無りしを境内寄外 息女あひみ、至て願ひて
縁み甘美しかい、花ふすて無量寿寺の私阿の弟子みお成一より、花宇
おいありたりしや、境内の時ありは寺領百石附せらと聞く、滅明寺の外
半ばを城主ゟ給秩禄ふと人の性・ふえや、明和安永の頃仕拵の花

ない住国の国の士人の女也、ある夜人おりて、我い 与やうせいてん新の接の前
言ちくんけんこうといふ者あり、昔い七月十九日といふと思て寝ぎ覚め、性
しま梦を覚しを思ふーれ夜も同し梦を見んかいふ女兄弟のゆるし事ナ
やあらんるかと心おかり魅と住宅へ強ひ一徒お接を疑ひみけれ
いな心一個阿称日すて帰りしれ又同し梦を見る事い数人を呼出して
誘言ふるかと同し梦仕て家を誘ふ物也、覚めて才人々を招くりんれか
ゆる与はまをありけ、言かれ初め物語人い住宅ふと中よかりけれい、
時ふ幸ふ住て遊びまし、或る日 師弟禅かけあて長公子を持て来のでを探
りたり、飯高ふ同し梦を見て話ふるも すき仲ゟや聞れくるみらんかと
思ふて掘り家ゟやといふ、果して女性を得り珍たり 去を洗ひ家へて
旨く拭ひるれい 笑美青殿前掛別當竹心賢公の私南天正十七年己丑
七月十八日と刻記せり、秋亜堂ふ送て家之人子れの物ふ存る位牌

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

九條家御用達
滿月堂本家
電話上四九二九番
振替京都四三二二番
出張店 市内汚多所通御茶師上ル西側

銃
15
2:28
后8-12

大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地
宇井縫藏

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066



No.

きがは便郵

求 銃

1·5
2·28
后8-12

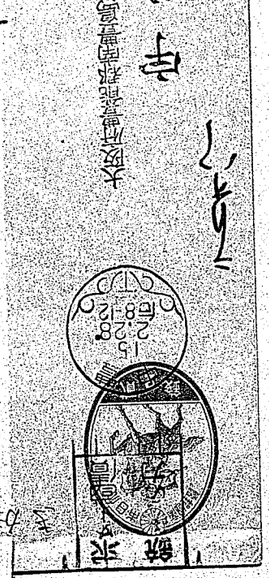
京都市上京区紫野北舟岡町三九

中根七郎様

大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地
守井縫藏

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04066

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号 0406



Ne.



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

御用達
滿月堂
電話上㊈九番
振替京都一二三番
出張店
市内河原町通蛸薬師上ル西側

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

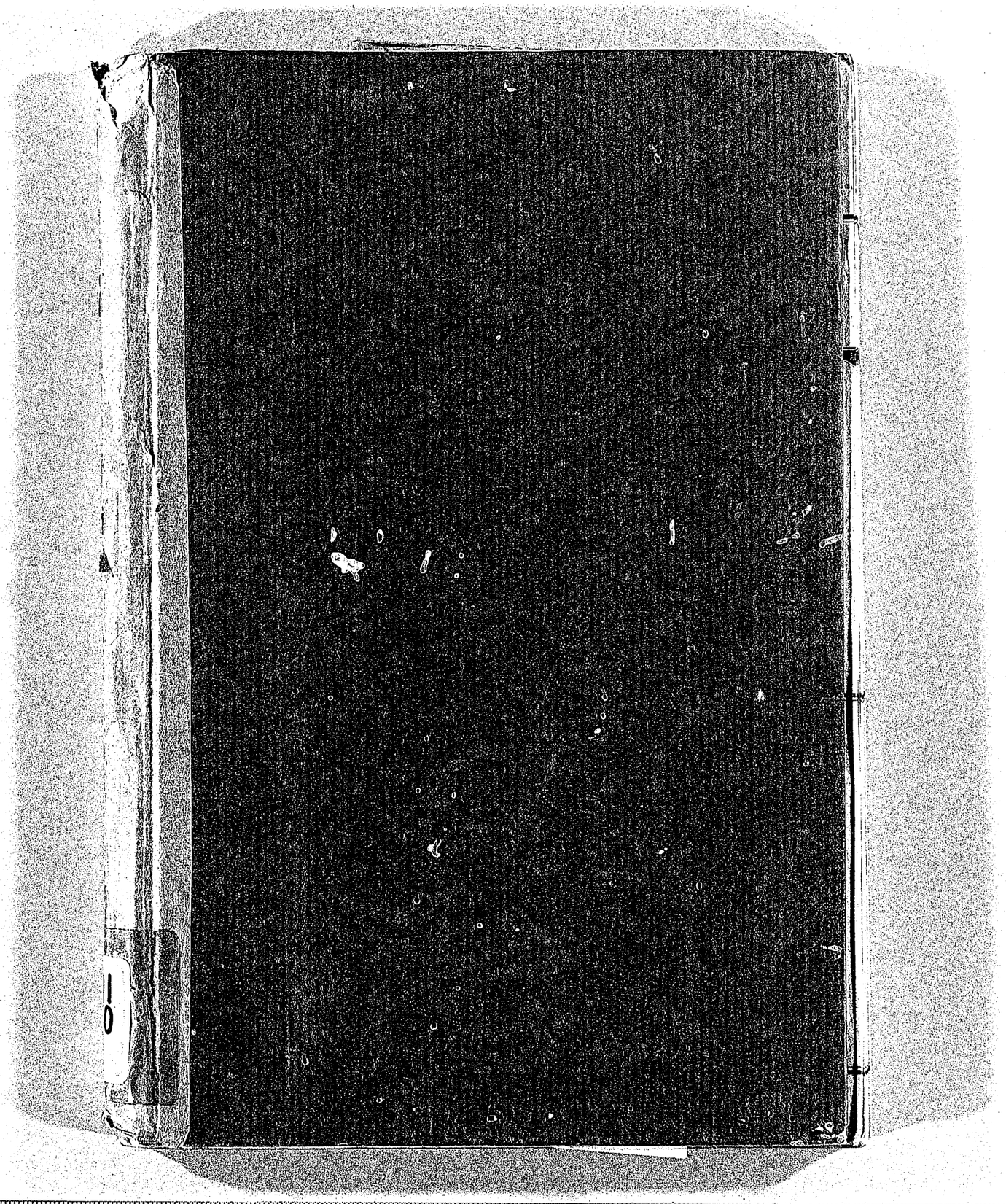


高座高等學校

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066

九條家御用達
京都廚電虫町柳騨前
滿月堂本家
電話上㈣一九二二番
振替京都四三二六番
出張店
市内河原通綾小路上ル西側

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04066